

2021 年 3 月 21 日高知教会説教

「神様と共に生きる幸い」松浦伝道師

- ・ 新約聖書:ルカによる福音書 第12章13～21節
- ・ 讃美歌:24、298、525

足の踏み場もないほどの群衆

本日はルカによる福音書第12章13～21節に記されている神様の御言葉を聞きたいと思います。私が礼拝説教を担当する時は、イースターやクリスマスなどの教会歴に関わる特別な礼拝を除いて、ルカによる福音書を連続して読んでいます。礼拝説教は月に一回ですので、毎回聖書の前後の話を踏まえて、説教をじゅんびしています。さて、ルカによる福音書の第12章1節に「イエス・キリストのもとに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった」とあります。やはり、群衆に囲まれるほどイエス様の人気は高く、ガリラヤ伝道を始められて以降、その評判は落ちることはありませんでした。現在、イエス様と弟子たち一行はエルサレムの都へと向かわれる道中です。そのため、「私達の町にも、あのイエス・キリストが来るかもしれない！」とクチコミが広がり、イエス様を一目見ようと群衆が詰め掛けてきました。足の踏み場もないほどの群衆の中から、本日、一人の男がイエス様に声をかけてきた。というのが今日の聖書箇所につながります。

もめ事を抱えた男の質問

この男はイエス様に、「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください」と願いました。イエス様にこんな個人的な、お金の話をするなんて、なんて失礼なんだと聖書を読んでいる私達は思ってしまうかもしれません。ですが、これは当時の人々の感覚からすれば当然のことだったようです。ヘブライ語で、「ラビ」と呼ばれていた当時のユダヤ人の間の宗教的指導者は、律法を教える者であり、律法に基づいて人々の生活の指導をしていました。律法学者やファリサイ派や祭司長と呼ばれている彼らは、このような民事訴訟的な事柄、財産問題なども律法に基づいて指導し、もめ事の調停をしていたのです。当時はユダヤ教の会堂で聖書を教えていたイエス様も、そういうラビの一人と考えられていましたから、このようなことを民衆の一人が願い出るのは普通のことであり、またそれはこの人がイエス様をラビとして信頼していることの印でした。しかしイエス様はこの求めを、「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか」と言って退けました。これは、「こんなつまらない、下らないことで私を煩わすな」とイエス様が怒っていたわけではありません。イエス様はこの言葉によってこの男性に、御自身の働きとラビたちの働きとの違いを示そうとしておられるのです。ラビたちは、律法に基づく生活の仕方を教え、もめ事を調停する裁判官や調停人の役割を果たしていました。つまり人々の生活の必要に答え、その町の法律相談所として、機能していた面があったのです。しかし神様の御子であられるイエス様が、この地上に来られた目的はそのような、働きをする為ではありません。私たちも、自分の生活におけるいろいろな問題の手っ取り早い解決を求め、何らかの便宜をはかってもらおうとして、イエス様のもとに来るなら、イエス様は同じように、「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか」と言って私たちの願いを退けると思います。

貪欲とはなにか？

しかしイエス様は、その願いを退けてそれでおしまいにはなさいませんでした。続けて今度は、群衆に向かって、「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい」と語られました。「そんな要求には応じられない」と冷たく断るだ

けではなくて、逆に彼らに一つの教えをお与えになったのです。「わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言うてください」と願うことは、注意して退けるべき、食欲だ、とイエス様はおっしゃいました。これは教えと言うよりも厳しい問いかけです。あなたの心は食欲に支配されているのではないか、群衆に問いかけたのです。

さて、「わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言うてください」と願ったこの男がどのような状況にあったのか、正確には分かりませんが、「兄弟」と言われているのが長男であり、彼は次男以下の立場だという事はわかります。当時の遺産相続においては、長男が父の家や財産をすべて受け継ぎ、次男以下は何がしかの分け前をもらう、のが当たり前でした。つまり遺産を受け継いだ長男は弟である彼に、必要に応じた取り分を与える義務があったのです。その正当な取り分を兄が渡してくれないので彼はイエス様にあのように願ったのだと思われます。しかし、その願いがイエス様によって「食欲だ」と呼ばれてしまいました。聖書を読んでいる私達は、なんだか不憫に思ってしまいます。もう少し、イエス様のお考えを知るために、読み進めてみましょう。

イエス様は続いて「有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである」とおっしゃいました。どんなに豊かな財産を持っていても、その財産によって命を買い取ることはできない、私たちの人生を決定づけるものは財産ではない、ということを語っています。「財産」と訳されている言葉は前の口語訳聖書では「持ち物」となっていました。つまりそれはお金という意味での財産だけの話ではないのです。私たちが、それがあることによって人生が決定づけられると思っているものはお金だけではないでしょう。能力、才能も一種の財産です。健康や体力もそうです。それらを有り余るほど持っていたら、人生どんなによいだろうか、と私たちは思います。また私たちは、それぞれに与えられている環境や状況によっても人生を左右されます。家庭環境や職場の状況、生きている時代の状況などにおいても、恵まれている人もいればそうでない人もいます。そういう点においても、豊かに持っている人と持っていない人の違いを感じるのです。

しかしイエス様はここで、それらのものを有り余るほど持っていて、それによって人の命、人生が決定づけられることはない、と教えておられるのです。そして、それらのものによって命が、人生が決定づけられると思ってそれらを求めることを「食欲」と言うておられるのです。イエス様に質問をしたこの男は、自分の正当な取り分を超えて何かを求めていたわけではありません。しかし、遺産を受け継いでそれによって自分の人生を築いていこうとしているという意味において、イエス様の言うておられる食欲に陥っているのです。ということは、私たちは誰もが、この食欲に陥っていると言わなければならないでしょう。私たちは、自分が何を持っているかによって人生が決定づけられると思っています。生まれつき与えられているものであれ、努力して獲得したものであれ、自分が持っている「持ち物」、つまり「財産」を頼りにして人生を築こうとしています。しかしイエス様はその思いを、「食欲」と呼んで仰いました。

金持ちのたとえ

続いてイエス様は一つのたとえ話を語られました。従来 of 倉を取り壊してより大きな倉を建てなければならないほどの有り余る収穫を得た金持ちの話です。収穫を全部しまいこんだ彼は「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と言いました。しかし神様は彼に「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前の用意した物は、いったいだれのものになるのか」とおっしゃいました。「これから先何年も生きて行く」つもりでいる人が、その日の内に、突然の病で、あるいは事故で、命を失うということがあります。明日自分が生きているかどうかを、私たちは知ることができません。どんなに豊かな財産を蓄えても、それで死を免れることはないし、突然死んでしまったら、その財産は誰か他の人のものになってしまうのです。

命を取り上げられる神様

神様はこの金持ちのことを「愚かな者よ」と言っておられます。彼が愚かだったのは、自分が得たもの、蓄えたものによって命を得ることができる、生きることができると思っていたからです。つまり、貪欲に陥っていたのです。愚かな者でなく賢い者となって生きるとは、自分が持っているもの、得たものによって人生が決まるという思いから解放されることです。私たちは人生を本当に決定づけるものが何であるかを知らなければなりません。私たちの人生を本当に決定づけるもの、それは、私たちのものとして蓄えられる何かではなくて、私たちに命を与え、人生を導き、そしてそれを終わらせられる神様です。自分に命を与え、それを終らせる神様がおられることを知ることによってこそ私たちは、自分が何を持っているかによって人生が決まるというのが迷信であると気づくのです。そして、少しでも多くのものを持つとする貪欲さから解放されるのです。

イエス様はこのたとえ話で、私たちの目を、私たちに命を与え、人生を導き、そしてそれを終わらせられる神様へと向けさせようとしておられます。「今夜、お前の命は取り上げられる」という言葉にそれが現れています。金持ちの男は命を失うのではなく、取り上げられるのです。それは、彼から命を取り上げる方がおられることを示しています。肉体の死は、命を失うことではなく、神様によってそれを取り上げられることなのです。つまり私たちの命は、神様によって与えられ、生かされているものなのです。この金持ちはそのことを見つめよとしましませんでした。彼は、自分の命、人生が、神様によって与えられ、導かれ、そして取り去られることを本気で考えていません。人生を決めるのは神様との関係ではなくて、自分が得たもの、蓄えたものだと思っているのです。だからその蓄えが豊かに得られた時、これで何年も生きていけると安心したのです。神様を抜きにして人生の計画を立てられると思ったのです。それが彼の愚かさであり、貪欲だったのです。

神様と共に歩む幸い

イエス様が私たちに教えて下さっているのは、私たちに命を与え、それを日々導き、そしてお定めになった時にそれを取り上げられる神様がおられることです。しかもその神様は、いつどんなひどいことをするか分からない得体の知れない恐ろしい方なのではなくて、私たちを本当に愛して下さっている天の父だということです。そしてその天の父なる神様の愛は、私たちの人生の終わりである死においても失われてしまうことはない、ということです。私たちは、明日の朝生きているかどうかを誰も知りません。それゆえに、「今夜、お前の命は取り上げられる」というお言葉は、私たち皆に対して語られています。しかしそれをどう聞かかは、信仰のあるなしによって天と地ほども違うのです。天の父なる神様が人生の主であられることを知らず、この神様との関係を持たずに生きている者にとっては、これは恐ろしい言葉、人生の空しさを思わせる言葉でしょう。しかし、私たちを本当に愛して下さっている父なる神様を知っている者は、この言葉を恐れずに聞くことができます。そこにも神様の父としての恵み、守り、導きがあることを知っているからです。そのことを私たちは、主イエス・キリストのご生涯全体を通して、とりわけ十字架の死と復活によって知らされています。神様は、独り子であるイエス様を、私たちと同じ人間としてこの世に遣わし、そのイエス様が私たちの罪を全て背負って十字架にかかって死んで下さることによって罪を赦し、私たちをも子として下さいました。そこに、罪人である私たちへの神様の愛がはっきりと示されています。そしてさらに父なる神様は、十字架にかかって死んだイエス様を三日目に復活させて下さいました。そのみ業によって、死んでしまえばそれでおしまいなのではなくて、その先に、神様が死に勝利して与えて下さる新しい命があることを示して下さいました。この主イエス・キリストの十字架の死と復活における神様の父としての愛を見つめている私たちは、たとえ今夜、自分の命が取り上げられるとしても、肉体の死の彼方になお神様の恵みによる復活と永遠の命が約束されていることを信じることができるのです。だからこそ、私達は刹那的に生

きるのではなくて、今日、自分に与えられている務めをしっかりと果たし、その実りを神様に委ねることができるのです。

神様の中で豊かになる

本日の箇所最後の21節に「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ」とあります。「このとおりだ」と言われているのはこの愚かな金持ちです。彼は自分のために富を積んだが、神の前に豊かにならなかったのです。神の前に豊かになるとはどういうことでしょうか。私たちはこれをとすれば、神様に喜ばれるようなよい行いに励むこと、善行を天に積むこと、と理解しがちです。神様の前に自分のよい行いを積み上げる、という感覚です。しかし「神の前に」と訳されているところは直訳すると「神の中へと」「神に向かって」となります。それは神様との関係を意識した言葉です。この金持ちが愚かだったのは、善行を積まなかったからではなくて、神様との関係を確立して生きようとしなかったからなのです。「自分のために富を積んだ」というのも、「自分自身へと」という言葉です。自分の持っているものによって生きることができると考え、自分自身へと富を積んだのです。それが貪欲です。その貪欲こそが彼の愚かさでした。本当に必要なのは、神様との関係における豊かさを求めることです。その豊かさは、私たちの良い行いによって得られるものではありません。それは私たちが積み上げ、蓄える豊かさではなくて、神様が、主イエス・キリストによって与えて下さる恵みの豊かさです。神の前に豊かになるとは、主イエス・キリストによって、その十字架と復活によって与えられた神様の救いの恵みを信じ、それにあずかって生きることです。そこに、貪欲から解放された新しい生き方が生まれるのです。

賢い者となるために

貪欲から解放されて新しく生きるなら、私たちは、愚かな者ではなく、賢い者となります。賢い者として生きるとは、自分の生活を守るためにイエス様を利用するのではなく、イエス様によって自分の生活が変えられていく歩みをするということです。その歩みの中で私達は、人は何によって生きるのか、という問いに答えが与えられます。そして、私たちに命を与え、それを養い育み、時に、それを取り去られる父なる神様と共に生きる者となるのです。その根本的な変化によって、日々の生活もまた変わっていきます。今日ここで具体的に示されている一つのことは、自分の正当な権利を主張することにも疑問を持つようになる、ということでした。イエス様はここで、自分の正当な取り分を得ることをいけないうっておられるわけではありません。しかしその時に、自分は何によって生きているのか、生きようとしているのか、自分の持っているものに依り頼んでいるのか、それとも神様に信頼を置いているのか、ということを常に振り返ることを求めておられます。そこには、自分に与えられているものを、自分の倉にしまいこむだけでなく、愛すべき隣人のために用いていくという生き方が与えられます。貪欲から解放されるとはそういうことです。それこそが、本当に賢い生き方、自分のために富を積むのではなく、父なる神様の恵みによって豊かになって生きることなのです。神様と共に歩む幸いに生きていることに感謝しましょう。

○祈り

父なる神様、この礼拝を感謝いたします。私達はあなたから与えられている賜物と恵に目を向けず、自分の持っているものだけを信じ、生きようとしてしまいます。しかし、主イエス・キリストはそのような歩みは「貪欲である」と仰いました。目に見えるものに心奪われ、より頼むのではなく、目に見えないお方に信頼して、歩むことが出来ますように。今私達は受難節の中を歩んでいます。なぜ私達の為にイエス様が十字架の上で苦しまれたのか。受難節を通して、与えられている恵みに生きることが出来ますように。 アーメン